

Q アトピー性皮膚炎に新しい薬
 が使えるようになったと聞きました
 が、どのような薬でしょうか？

あなたの「カルテ」

(286)

アトピー性皮膚炎

アトピー性皮膚炎は慢性かゆみそのものやかゆみのなかゆみのある湿疹病変によって生じる睡眠の質の悪化を主体とした疾患です。低下、見た目の問題や精神内の有病率は10%程度で、状態への影響はアトピー子どもはさらに多く、成人性皮膚炎に罹患していることによる負担は極めて大きいと言えます。仕事や学業



飯塚市立病院皮膚科科長

江崎 仁一医師

新薬は主治医と相談を

から人間関係まで、患者の生活に幅広く影響しています。その結果、労働生産性が低下し、社会に経済的損失を与えていると推定されています。

新薬は「デュピクセント」で、インターロイキン4や13といった皮膚の炎症反応を引き起こす物質を抑える生物学的製剤に分類されます。生物学的製剤は、2002年に慢性炎症性腸疾患であるクローン病に承認されて以来、様々な疾患に使用されるようになり、良好な治療成績をあげています。アトピー性皮膚炎に対する治療法は、4月から使用可能となつていきます。

これまでの治療は、薬物療法・スキンケア・悪化因子の検索と対策の組み合わせによる対症療法が基本です。

治療法と比較して、皮膚病の治療法であるため、現時点では根治させる治療法はなく、病気がどうも付き合っていく必要がありそうです。

もちろん新薬を使用した場合も同じですが、これまでの臨床試験では、既存の治療法と比較して、皮膚病の治療法であるため、現時点では根治させる治療法はなく、病気がどうも付き合っていく必要がありそうです。

また、副作用や奇みなど）などの副作用や奇みなど）に注意する必要があります。生虫感染に注意する必要があります。アレルギー疾患治療中の方は、自己判断で治療を中止しないようにしてください。

生物学的製剤一般について、生物学的製剤に比べて、治療費が高額となるため、皮膚科専門医に相談し、その上で自分に合った治療法を選択していただきたいと思

繰り返しになりますが、アトピー性皮膚炎に対する治療は、いずれも対症療法であり、日本皮膚科学会のガイドラインは治療のゴールとして、「症状がないか、あつても軽微で、日常生活に支障がなく、薬物療法もあまり必要としない状態に到達し、その状態を維持すること」と定義しています。外用治療を基本に、新薬を含めた他の治療法について主治医と相談し、自身の負担の軽減、さらには生活の質の向上を目指す、全人的医療がアトピー性皮膚炎治療には必要です。

「あなたのカルテ」(原則・毎週水曜日掲載)では最新の治療から病気の予防まで、医療にかかわるさまざまな話題を取り上げます。筑豊の医療機関に勤務する医師や保健師など専門家が執筆します。